

hito*yume
インタビュー

巻頭特集

放送作家・脚本家

小山薫堂

「くまモン」の生みの親であり、名作映画「おくりびと」の脚本も手掛け、多彩に活躍する小山さん。

小学校時代の運命を決めた先生との出会い、そして豊かな発想の秘訣とは？
未来へ向け、いま先生方へ伝えたいことを伺いました。



【こやま くんどう】

1964年、熊本県天草市生まれ。

日本大学芸術学部放送学科在籍中に放送作家として活動開始。「カノッサの屈辱」「料理の鉄人」「東京ワンダーホテル」など斬新な番組を数多く企画。また脚本を手掛けた2008年公開の映画「おくりびと」で第32回日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第81回米アカデミー賞外国語映画賞獲得。作詞に「ふるさと」（第80回NHK全国学校音楽コンクール小学校の部課題曲）、著書に、絵本「まってる。」「いのちのかぞえかた」「パチパチのほし」（共に千倉書房）など。その他、熊本県地域プロジェクトアドバイザー、京都造形芸術大学副学長を務めるなど活動分野は多岐にわたる。

作文が賞に入選したとき、 先生が大喜びしてくれたことが、 作家となるきっかけになった。

東京タワーのふもとにある小山さんの会社を訪ねる。事務所のある階のエレベーターの扉が開くと、別世界に思わずギョとした。ニューヨーク・ブルックリンを彷彿とする、スモークかつモダンな佇まい。

「小山はお客様へのサプライズが好きでして」と、秘書の方が微笑む。スペースがすべてガラスで仕切られた、見通しの良い広々としたオフィス。ガラスの向こうから、会議を終えた主がやってきた。

泣き虫で、臆病。 人に気を遣う子供だった。

子供のころはどのようなお子さんでしたか。

生まれは熊本県天草市(当時は本渡市)。両親とも仕事が忙しく、僕は生まれてからすぐにベビーシッターの老夫婦に預けられ、夜遅くになって自宅に帰るという生活を送りました。だから、お年寄りの家で甘やかされて育つた子というわけですね。

僕の町は田舎のなかではいちばんの都会で、夜になると閑散としたアーケードでスケートボードやローラースケートなど、都会的な遊びをしたものです。

僕といえば、とても感受性が強い子で。いたって臆病な、優等生でしたね。親や友だち、先生に嫌われたくない、すごく人に気を遣っていました。とにかく泣き虫で、「別離」という状況になると特に涙もろくなつて。

いちばん泣いた記憶は。

いつかなあ……ちなみにいままでの人生でいちばん泣いたのは、高校1年生のときです。僕が通っていた高校は全寮制で、3年生は下級生にとって家族以上の絶対的存在。その3年生の先輩たちが卒業するときに号泣しました(笑)。

大塚先生から受けた 「サバイバル」な授業。

天草での小学校時代、印象深かった先生は。

5、6年生のときの担任だった大塚先生です。普通の先生とは違い個性的な先生で、アウトドア志向がとても強くて。ホームルームでは、山でナイフの使い方なんか子供に教えるんですよ(笑)。

大塚先生は猟やハンティングも大好



4~5歳頃。

きで、家庭訪問に来たときは、親父と猟銃の話で盛り上がっちゃった(笑)。

先生の影響で親父は猟銃の免許を取り、散弾銃を買ったくらいです。

また、先生はいまでは絶対にやらないようなことも子供たちにさせていましたね。例えば、3階の非常階段からロープを一本吊り落として、下までロープを伝って降りる訓練。命綱をつけずですよ。いまなら大問題になるし、危なくて絶対しないでしょう?」

当時でも十分危なかったのでは! それは避難訓練として?

いえ、「サバイバル」の訓練ですね。

小山さんは無事降りられましたか。

怖がりの僕は途中までは慎重にきたんですけど、途中で手がきつくなつて離しちゃって：そのまま下までバババーツと(笑)。手の皮が全部めくれました。いまでもあのときの感触は：この手にしつかり、残っていますね。

まあこんな怖い思いをさせられたけれど、先生を嫌いになるということはなかったですね。

先生に褒めちぎられ、「喜ばれる」嬉しさを味わう。

成績は優等生だったのですね。

良かったです。オール5のときもありました。自分のことを「神童」だと思っていた(笑)。ところが中学受験に失敗して。神童のはずなのに！ 思えばあれが人生初の挫折でした。

天草市の小中学校で入選した優秀作品を集めた文集『あまくさ』に、何回か作文が掲載されたとか。

はい。2年生、5年生、6年生の3回、

僕の作品が載りました。

2年生のときの作文『あたらしいへや』(大工さんが家を改修し、おじいちゃんとおばあちゃんの部屋を作った様子を書いた)

5年生のときの作文『どんなにむずかしいことでも』(授業の美化作業として、男子たちで力を合わせて6本の木を根っこから掘り上げた様子を書き、協力の大切さ、やり抜くことの喜びを語った)

6年生のときの作文『本渡の市』の小づかい調べ(子供のお小遣いの使い方を、学校全体レベルで細かく調べて分析した)

【※要約は編集部による】

50年の歴史を持つ優秀作品集『あまくさ』。小山さんは「作文は好きという気持ち伝えるラブレターです」を特別に寄稿。



このなかで、5年生で選ばれたときの経験がとて大きくて。木の根っこをみんなで掘り返す話なんですけど、この

作文を担当だった大塚先生がすごく褒めてくれたんですね。

「小山くん、作文が上手だね！」って。僕は入選したこと以上に、それが嬉しくて。あんなに喜んでくれたから、もつとがんばろうと。そして文章を書くことが好きになりました。放送作家になるきっかけになったと思っています。

大塚先生の存在が、いまの道を進むきっかけに。

大塚先生は子供を型にはめず、ちよつと外れていても子供に良いと思っただことはさせるといふ信念を持っていた。そこは筋が通っていましたね。常に自分の責任のもとで、何度でもチャレンジしていく精神も教えてくれました。

のちに校長先生になって、人望も厚かったとか。僕は番組をつくるときに



「人が思わないことを思う、というのが才能で、その才能はステキです」

「美味しいものを知ったら、さらに美味しいものを食べたいくなる。今度はそれをどう作ろうかと工夫をし、考え始める。それと同じですね」



「先生、喜んでくれるかな？」と思いを馳せたものです。それからの僕は、シヨートシヨートの第一人者である星新一の作品を愛読し、中学からは中原中也、高校生ときには志賀直哉に熱中していきました。

中原中也に傾倒する、なかなかオマセな少年になった。

はい。高校時代、ラブレターに中也の

詩『生い立ちの歌』を引用したら、相手からすごく気持ち悪がられました（笑）。

熊本が生んだ人気者「くまモン」。 その誕生の秘密とは。

小山さんは映像、文章といったフィールドのほか、企業や地域のアドバイザーをされるなど活躍は多岐にわた

たっています。ぜひ斬新な発想を生み出すコツを伺いたいと思います。全国的な知名度を誇る大人気キャラ「くまモン」を生み出した発想は、どこからきたのですか？

僕の発想、クリエイティブのすべての原動力は、「近くにいる人を喜ばせる」ことです。

「くまモン」も実は大ヒットさせようとつくったもんじゃありませんよ。熊本県の地域振興キャンペーン「くまもとサプライズ」のアドバイザーを依頼され、「ロゴだけじゃ喜んでくれないな。こういうキャラクターを提案の、おまけにつけたら、あの人は喜ぶんじゃないかな？」と閃いて、偶然「おまけ」に加えたのが始まりなんです。

このキャラは斬新だとか、賞を獲ろうとか、大衆に受けようとか狙ったものではなかった…。

全然ないですね。近くにいる、依頼してくれた人の顔を思い浮かべて、その人を喜ばせるにはどうしたらいいか、と考えた。

映画「おくりびと」もそう。僕に脚本を頼んでくれた人に、僕に頼んで良

かったと思わせるために「高いクオリティーのものを書かない」という使命感が生まれ、クリエイティブなものにつながった。

僕の投げたものに「わあ面白い！」と反応してくれると僕のなかに幸福感が生まれ、自然に閃くんですね。「近くにいる相手の期待にもっと応えたい」という想いが原動力であり、発想を生み出すコツなんです。

だから、逆に喜んでくれない相手、反応がいまひとつの相手だと、アイデアも閃かないですね。あっても、教えたくない（笑）。

閃きも努力する気も湧いてこない。クリエイティブとはそんなものなんですね。

そんなものです。相手の喜ぶ表情で、得も言われぬ幸福感が生まれる。それが自分の背中をさらに押ししてくれる。それは人のもつ、本能的なものだと思いますね。

やさやかなことを、 喜びに変えられる子に。

いまの子供たちに言いたいことは。

小学校の先生は、 未来をつくっている。 最もリスペクトされるべき仕事。

「思い出を、意識してつくる」ということ。二十歳の自分に思い出をプレゼントするような気持ちで、いろいろな行動を起こしてほしいんです。

僕は小学校高学年のとき100キロの道をサイクリングしたことがあるんですが、そのとき「きつと大人になったらよい思い出になるだろうな」と思ってた。こうした思い出は、人生の宝物になるんです。

そして、身の回りのささいなことに對して見方を変えることで、幸せを感じるようになれるといいですね。おにぎり1個でも「なんだ、おにぎりか…」ではなく、どうせ食べるなら「うわーっ、美味しいな!」と喜びを感じて食べる。そんな人生こそ、幸せだと僕は思うんです。

「サプライズ」を 子供たちに 考えさせてみたら。

僕は2011年に『嵐のワクワク学校』（アイドルグループの『嵐』が東京ドームを教室に見立てて授業を行う学びのイベント）を企画・プロデュースしたのですが、このとき「教え方によって、子供たちの表情が生き生きと変わる」

ことに気づいたんですね。教えることの影響を、間近で感じた。この教える楽しさ、工夫することの尊さを、先生方にも味わってほしいと思いました。

子供たちが生き生きと変わる授業。そのアイデアを、ぜひ小山さんからいただけたら。

「サプライズ」を子供たちに考えさせてみてはどうでしょう。父の日や母の日などのイベントに、相手をサプライズで喜ばせることを考えさせられます。

サプライズを演出するために、相手のことを観察し、気持ちを知り、「何をしたらいちばん喜ぶか」考える必要がありますよね。この体験は、子供たちの人生のヒントになるんじゃないかと思えます。

そして、手紙を書かせるのもいいですね。手紙をもらって喜ばない人はいない。ラブレターになると必死でしょう（笑）。

あるいは入学したてのまだ字を書くこともおぼつかない1年生のとき、「6年生の自分」に向けて手紙を書かせ、回収する。

そして6年生になったら、それを渡しあげてあげます。もし転校したら、そこへ送ってあげればいい。その先生のことを、子供は一生忘れないでしょう。

人生の分岐点。 そこにいるのが 小学校の先生。

やはり小学校の先生の存在は、大人になっても大きいものですね。

僕の場合は大塚先生が作文を「面白い!」と言ってくれたことが自分の



小学校低学年の頃、中央が本人。

「実は偶然生まれたキャラクターだった」というくまモンと。



幸福感につながって、じゃ、もっと喜ばせるにはどうしたらいいんだろうと工夫を始めて、文章が上手になっていったと思うんですね。
それも先生はただ褒めたんじゃないで、全身ですごく喜んでくれた。「いいね」くらいなら、僕の人生変わっていったかも(笑)。だから先生方は子供を褒めるときは、オーバーアクションくらいがいい。

小山さんにとって、小学校の先生とは。

先生という職業は、「一人の人間の一生を、左右する」職業です。
僕はいま大学で学生を教えています。大人になってしまつと、どんなにがんばっても人はなかなか変えられないんですね。人生の早いころの時期の教育の大切さに日々痛感しているところ

です。
子供にとっては、人生一度きりの1年生、2年生……。その時期に、人格がつくられる。いわば、人生の分岐点をつくる仕事だと思っんです。
最後に、先生方へのメッセージをお願いします。
人生の分岐点と言いましたが、子供にとつてちよつとしたささいなことから良くなる可能性もある一方で、悪くなつてしまう危険性もはらんでいる。右に行くか、左に行くか。先生次第で変わつてしまふ。そんな意味では、大変な仕事だと思っんです。
でも、これだけ人の人生に関与する職業は、なかなか世の中にないのではないでしょう。もつともつと世の中で、尊敬されていい仕事ナンバーワンと言えるでしょう。
僕は教育とは「未来をつくること」だと思っんです。学校で教えるだけじゃないんですね。皆さんが育てた子供たちが、日本の未来をつくっていく。そんな未来の人材をつくっているのが先生です。
「未来をつくる、世の中でいちばん大切な職業」。

小学校の先生方へ、僕からこう伝えさせていたきたいと思っんです。

「どんなに力の強い木でも、ぼくたちの手にかつちやおしまいだ。」
小学5年生のとき、市の文集に選ばれて載つた作品の最後の一文だ。作家への道のきつかけになったという。

温和でユーモアあふれるその語り口が力強く変わったのは、「小学校の先生とは？」と聞いたとき。
「未来をつくる。僕はこんなに大切な仕事はないと思っっています」
『料理の鉄人』、『くまモン』、『おくりびと』……。

40年前天草の小学校で、ちよつと型破りな大塚先生から褒められたとき、薫堂少年が感じた喜びと幸福感。それがいま、さまざまなる形となつて、巡り巡つて我々に届けられているのかもしれない。そう感じながら、サプライズ感あふれる「ブルクリン」のオフィスを後にした。

読者プレゼント!



小山薫堂さんの著書『小山薫堂 幸せの仕事術』を3名様にプレゼントします。応募の詳細は35ページをご覧ください。愛用の万年筆でサインとともに記した座右の銘は北大路魯山人の言葉「座辺師友(ざへんしゆう)」。